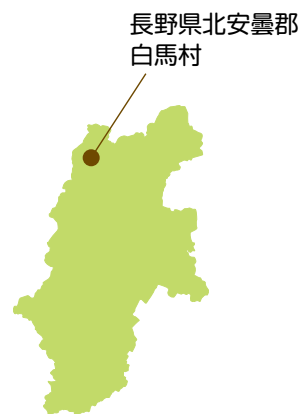


女性のアイデアと力で6次化が成功し、男性中心の職場が華やかに活気づく

しろうま農場 有限会社ティーエム

※2018年3月現在

代表者名	津滝 明子	資本金	20 百万円
設立年	2004 年 3 月 3 日	売上高	94 百万円 (2017 年 3 月期)
事業内容	生産 (コメ、大豆、そば)、消費者直売、観光・交流、飲食、作業受託	経営規模	田 112ha、畑 8ha、樹園地 2ha、作業受託 (水稲→部分受託 3ha)、直売所 20㎡ (約 30 種類)
従事者数	22 人 (うち女性 8 人。女性内訳: 役員 3 人、一般職 2 人、常勤パート 3 人)		
女性活躍支援	[女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援] 産前産後休業、育児休業、育児休業代替要員を確保 [女性に配慮して取組んだ環境整備] 重労働等の業務改善		



経営概況

長野五輪の舞台となった北アルプス山麓の白馬村は、海外のスキーヤーに人気が高い国際色豊かな山岳リゾート地。その美しい景観に現れるしろうま農場有限会社ティーエムは、代表・津滝明子氏の夫である俊幸氏が創立。流通関連企業やリゾート開発コンサルタント業に携わった俊幸氏が30代の1991年、地元の白馬村で農作業受託の組合を始め、村の高齢化により委託される農地が増えたことで2004年に法人化した。その後、俊幸氏が村議員に出馬することになり、妻の明子氏が前職の白馬村役場を退職して2013年に入社。3年の準備期間を経て2016年に代表に就任

した。

白馬村の耕作面積の21%にあたる120haの広大な農地では、売上上位を占めるコメ、大豆、そばに、ブルーベリーやトウモロコシ、トマトなどの野菜を生産。いずれも「売り先を決めてから作る」を徹底した受注生産方針で販路を広げる。

さらに「作るだけが農ではない」という俊幸氏の考えから、生産だけにとどまらない複合経営を行う。自社のブルーベリーやトマト、コメの加工品販売 (すべて委託加工) のほか、直売所兼農家レストランの経営や、旅行会社と提携の体験農業 (田植え、ブルーベリーや野菜の収穫) と幅広く展開している。2014年に起きた神城断層地震で農地や建物が被害を受けたものの、3年後の2017年3月決算期の売上は昨年度より1,000万円増え、経常利益も順調に伸ばしている。従業員の大半が45歳未満という若いパワーにあふれ、勢いに乗る農業法人だ。

1. 経営者の理念・意識改革

当初は男性従業員を中心に稲作を行っていたが、米価の下落やコメの需要減少などの時代の流



れを見て、米以外の生産と6次産業化を取り入れた複合経営に踏み切った。これらの新規事業には女性の力が必要不可欠と考え、それから女性の雇用を積極的に行っている。2009年にオープンしたブルーベリー園では、夏季の臨時パートに毎年20名以上の女性スタッフを雇い、繊細な手作業が必要となる摘み取り・選別作業のほとんどを彼女たちが担当している。

2013年には農家レストラン「農かふえ白馬そだち」が開業。明子氏が店の立ち上げから関わり、現在は経営から調理、接客まですべて女性スタッフが担当する。メニューには自社米のおにぎり定食や、農園の野菜を盛り込んだ白馬豚のしょうが焼き定食など、思わず心がホッとする家庭的な料理が揃う。食材のほとんどが自社産というのもこだわりで、たくさん収穫できた野菜は加工して冷凍保存してメニューに活用。これにより農作物の廃棄はほぼゼロになったという。2haの広大なブルーベリー園を一望する店内は掃除が行き届き、清潔感にあふれた空間で、直売コーナーにはジャムや味噌、酒、醤油などの自社製品が見やすく並べられて買い物がゆっくり楽しめる。そんな女性目線を活かした店づくりで、開店から売上を順調に伸ばしている。

2. 女性が働きやすい環境の整備

ブルーベリー農園の女性スタッフは固定時給だけでなく、収穫量にあわせた報酬も上乘せしている。事務担当の女性パート職員が「やりがいをもって働けるように」と考えたアイデアで、この方式を取り入れてから収穫量が確実に増加した。また、「頑張った分、報酬がアップする」という評判が村内の女性の間で広がり、パートやアルバイトの希望者が増えるという嬉しい相乗効果もあった。

女性の雇用が増えたことで、女性社員が結婚や出産、育児で気兼ねなく休暇が取得できるように就業規程を改正。2017年には農家レストランの

女性社員1名が産休をとり、翌年春に復帰する予定だ。

3. 女性の活躍を応援する環境づくり

農家レストランの女性社員の調理師免許取得には、会社が全面的に協力したほか、調理技術の習得やサービスマナーなどの研修を定期的に行う。

地域女性の活動にも連携し、自社大豆製の味噌は、白馬村の女性グループに加工を委託。平均年齢70歳・15名からなるメンバーは「村の若い衆しゅうが育てた豆だから、私らもおいしい味噌を作りたい」と意気込みをもって取り組んでいる。

4. 女性代表がいるメリット

「従業員が代表者に相談しやすい環境ができた」と明子氏。従業員の妻から相談を受けることも多く、身近に相談できる家族のような存在になっている。明子氏が設立した販売会社「株式会社白馬そだち」の名前には人を育て、白馬村の地域創生に貢献する意味も持つ。その思い通り、村外出身の従業員が結婚して村で家を持ち、津滝夫妻が“孫”と呼ぶ子供が生まれた。会社の代表だけでなく、従業員の家族や母のような存在となって若い農業者を育て、ふるさとの活性化に貢献していく。

審査委員の声

1ターンの若手や地元女性グループが、しろま農場を軸に活気を生みだす理想的な地域活性モデルに見えた。生産の標準化を図り、結果、地元以外から就農した若手が活躍し地域に根をはっている。またカフェ経営と生産を分離せず連携することでメニューや新商品開発に活き、6次産業化で地元女性の力を借りている。リーダーシップある創業者から調整型の女性社長（妻）へのバトンタッチも絶妙。さらに若手が育ち20年後も活気ある経営体の姿を思い浮かべることができた。